〔書評・文献紹介〕

Sarah Stroumsa
Andalus and Sefarad: On Philosophy and Its History in Islamic Spain
Princeton, NJ: Princeton University Press, 2019, pp. xxi+220,
ISBN9780691176437

神 田　愛 子

本書では，主に 10 世紀から 12 世紀のイベリア半島の思想史に対する，著者自身の「統合的かつ多焦点のアプローチ」が展開されている。また，本書の題目『アンダルスとセファラド――イスラーム・スペインにおける哲学とその歴史――』（*Andalus and Sefarad: On Philosophy and Its History in Islamic Spain*）が，本書の焦点と主要な論点を反映しているものと言える。なぜなら，アラビア語の「アンダルス」は，広義にはイベリア半島を，中世の文脈ではアラブ化したスペインを指しており，その一方で，ヘブライ語の「セファラド」は，広義にはスペインを，中世の文脈ではレコンキスタ完了後，1492 年にイベリア半島を追放される前のユダヤ人を指していることから，イベリア半島における，アラビア語とヘブライ語を用いるムスリムとユダヤ人の哲学の歴史が本書の主題であり，主要な論点にもなっていると解し得るからである。

本書における著者の主張は，以下の 3 点と捉えられる。第一に，中世アンダルスの思想史は，イスラーム思想とユダヤ思想の二つに区分して扱うのではなく，統合化した単一の思想圏として扱うべきであるという点である。第二に，中世アンダルスのユダヤ共同体は相対的に小さいとはいえ，ユダヤ思想は不釣合なほどにイスラーム哲学の発展に貢献したという点である。そして第三に，ユダヤ思想はイスラーム王朝の統治者によって，イスラーム主流派の思想の影として形成されたという，学的偏見を正す必要があるという点である。

本書は，序論と全 5 章により構成されている。著者はまず序論において，本書で中心的に扱う時代と地域を，10 世紀から 12 世紀のイベリア半島に設定すると述べた上で，マイモニデスが自らを生涯「セファラディ」（ha-sefaradi）と名乗ったことから理解し得るように（p. 3），アンダルスという土地が，当時，その地に住む者にとって特別の領域であったことを示唆している。また，歴史家であるホ

ジソン（Marshall Hodgson, d. 1968）が概念化したように，アンダルスは，イスラームという宗教に関係するというよりも，歴史的にイスラームとムスリムに関係する社会的かつ文化的な複合体としての「イスラーム圏」（Islamicate）であって，そこにはイスラームだけでなく，多様な宗教の共同体が包含されてきたと著者は述べている。確かに，イスラーム圏における共通語はアラビア語であるが，そこでは，少数派も彼ら独自の宗教と言語――例えば，ペルシャ語，シリア語，コプト語，ギリシャ語，ヘブライ語――を保持することができたわけであるし，さらにユダヤ・アラビア語のように，独自の文字を用いてアラビア語を使うこともできたからである（pp. 4–5）。

著者は，アンダルスの数多の思想家の名前を挙げつつ，アンダルスの神学と哲学は，異種で競合する学派としてではなく，単一で首尾一貫したものとして考察されるべきだと論じている。ムスリムとユダヤ人のエリートが，歴史家ゴイテイン（Shlomo Dov Goitein, d. 1985）の語るところの「共生」（symbiosis）（p. 12）を超えて，同じ知的関心を共有し，友情を育んできたと考えることによって，アンダルスにおける「思弁的思考」の発展を辿ることが可能となると，著者は主張している。著者は，特定の政治的あるいは知的な運動を考察することによって，アンダルスのムスリムとユダヤ人の学者の歴史は「単一の物語」として描くのが最善であるとした点について，主に論証している。それは序論に明確に表されている。

続く第一章「起源」（Beginnings）では，10 世紀イベリア半島の哲学と理性的思考の出現が描かれている。著者は最初期のアンダルスのムスリム思想家で，ムゥタズィラ派神学を学び，アンダルスの神秘主義的哲学の始祖となった，新プラトン主義者のイブン・マサッラ（Ibn Masarra, d. 931）を取り上げ，本書の統合的アプローチの試みとしている。例えば，著者はイブン・マサッラの著述の中にユダヤ的なもの，特にユダヤ教神秘主義思想カバラーの基本教典『創造の書』（*Sefer Yeṣira*）における，文字を神の属性かつ創造の手段と捉えた点を見出し（p. 52），イスラーム思想におけるユダヤ思想の混交は，アンダルスの哲学の極めて初期からあったと訴えている。

また，後ウマイヤ朝（756–1031）の宰相アル＝マンスール（al-Manṣūr, d. 1002）の検閲によって，ムスリム学者の著作は被害を被った一方で，ユダヤ人学者の著作は検閲を逃れたために，後にイスラーム哲学派の思想が残存したと彼女は主張している。シーア派分派のイスマーイール派[1)]が建てた，ファーティマ朝

1） イスラーム教シーア派の一分派。ムハンマドは将来，救世主（マフディー）として再臨するとして，秘密結社的な宣教活動を展開したウバイドゥッラー（‘Ubayd Allāh, d. 934）はイマーム位を宣言し，北アフリカにファーティマ朝を創設した。コーランの外面的（ẓāhir）で字義的解釈より，隠された（bāṭin）秘義的解釈を重視したことから，バーティン派と呼ば

（909–1171）の政治的バーティニズムが，新プラトン主義的な秘義的教義への偏愛と結び付くとされたことから，ファーティマ朝と後ウマイヤ朝の政治闘争が，新プラトン主義的神秘思想の抑制に繋がったと著者は論じている。反ファーティマ朝政策は同胞のムスリムのみを対象にしたため，ユダヤ教徒は教義的抑圧から免れ，「禁じられた伝承の守護者」となって，イスラーム哲学を発展させていったというわけである（p. 60）。

本章では，無名のアンダルスの思想家が数多く取り上げられているが，彼らとより有名な思想家の説明とを織り交ぜることにより，この時期のユダヤ人とムスリムが，宗教と文化の独立性を保ちつつ，多くの知的源泉と同じ知的潮流を共有したことが描かれている。

第二章「神学派と法学派」（Theological and Legal Schools）では，イスラームの理性的神学派である「ムゥタズィラ派」（the Muʿtazila），クルアーンとハディースのみを法源とし，厳格な字義解釈を唱えた「ザーヒル法学派」（Ẓāhirism），さらに，ムゥタズィラ派の影響を強く受け，かつ厳密な聖書主義を謳う「カライ派」（Karaites）の，三つの学派の思想を取り上げている。中世のイスラーム圏では，哲学の進展は宗教と宗教的思考とが強く結びついており，神学と法学が哲学の学習を構成していたことから，哲学派よりも神学派や法学派によって，学者が重視していたものが明らかになることを著者は示している（p. 61）。著者は，「アンダルスのカライ派共同体が，首尾一貫した教えを含む作品として残されたムゥタズィラ派の書と思想を，アンダルスへ実質的に導入したことを説明する，決定的な繋がりを提示している」と述べており（p. 76），11 世紀にムゥタズィラ派神学が衰退した後も，カライ派がその教えを存続させたことを示唆している。

次の第三章「知的エリート」（Intellectual Elites）では，アンダルスの哲学者の多様な社会的環境を描くと同時に，共通する知的関心を表している。イスラームの統治機関において，ユダヤ知識人の存在は顕著であり，ムスリムの統治者にとって，部外者であるユダヤ人に対する信頼は大きかったという。なぜなら，庇護民（dhimmī）という劣った身分が，彼らが権力を掌握することを妨げ，政治的脅威にならないようにしたからである。彼らがムスリムの統治機関に入る動機は，まずは共同体の安全とその保障のためであったが，その一方で，知識人の間の共通性が，民族と宗教の壁を乗り越えさせたと，著者は論じる。例えば，イブン・バーッジャ（Ibn Bājjah, d. 1138）は，ユダヤ人医師のイブン・ハスダイ（Ibn Ḥasdāy, d. 1136）と交流を保ち，哲学的友情を結んでいる。彼ら知識人は同じ書物を読み，同じカリキュラムを共有し，類似の態度を保ったが，それゆえ同宗信者から疎外感を感じていた。彼らが感じた疎外感は，興味を分かち合う仲間を求

れた。

めることに繋がり，それが，多数派のムスリムと地勢的に少数派のユダヤ人が，相互に結実する要因となったと，著者は主張している。

続く第四章「新プラトン主義者の侵入」（Neoplatonist Inroads）では，イベリア半島における新プラトン主義の発展と生き残りが描かれている。イベリア半島における新プラトン主義は，『純正同胞団書簡集』（*Rasā'il Ikhwān al-Ṣafā'*），『ナバテア人の農業』（*al-Filāḥa al-Nabaṭiyya*），さらに他のイスマーイール派関連の著作を通じて，イブン・マサッラらの支持を受けて出現した。しかしシーア派の分派で，秘義的解釈（taʾwīl）と隠された奥義（bāṭin）を重視するイスマーイール派に対するスンナ派が感じた脅威と，イスマーイール派に鼓舞された思想の保持者に対する迫害への恐れから，新プラトン主義は目立たずにきたと，著者は分析する。一方で，検閲の対象とならなかった，イブン・ガビロール（Ibn Gabirol, d. 1058），イブン・パクダ（Ibn Paqda, d. 1120），ユダ・ハレヴィ（Judah Halevi, d. 1141），イブン・ツァディーク（Ibn Ṣaddīq, d. 1149），イブン・エズラ（Ibn Ezra, d. 1164）らのユダヤ学者の著作をとおして，新プラトン主義は存続した。イサーク・イスラエリ（Isaac Israeli, d. 955）に始まるユダヤ教の論考が，アンダルスの哲学における新プラトン主義の発展へと導いたからである。これを象徴するのが，同胞からは無視されたが，ヘブライ語訳で知られる，イスラーム哲学者アル＝バタルヤウシ（al-Baṭalyawsī, d. 1127）であろう。

著者は，マグリブとアンダルスで強い影響力を保った，スンナ派四正統学派の一つである，マーリク学派[2)]の新プラトン主義に対する懐疑的な態度と，アンダルスにおけるユダヤ人の「全く不相応な」受容（p. 120）を対比させている。マーリク学派のファーティマ朝政治に対する関心は，一方でアル＝バタルヤウシに対する否定的反応を，他方でユダヤ人による彼の著作の積極的受容を説明する。著者は，アンダルスの新プラトン主義の歴史の考察をとおして，ムスリムとユダヤ人の著作の再考へ繋げようとしたのであろう。

最後の第五章「アリストテレス主義新正統派とアンダルスの反乱」（Aristotelian Neo-Orthodoxy and Andalusian Revolts）では，著者が「新正統派」と呼ぶ，ムワッヒド朝[3)]（1130–1269）期のアリストテレス主義に焦点を移し，新プラトン主義化した著述家と，ガザーリー（d. 1111）からの異議に対する応答として，アンダルスの哲学者がどのように逍遥学派の伝統と同一視され，また，アリストテレ

2） マーリク・イブン・アナスを始祖とする，イスラーム四大法学派の一つ。メディナの慣行を重視し，「個人の意見」を避ける傾向がある。主にエジプト，スペイン，アフリカに勢力を持つ。

3） 神の唯一性（タウヒード）を重視する，イブン・トゥーマルトが推し進めたイスラーム改革運動を基盤に建国された。哲学者イブン・トゥファイルは宮廷医として，アヴェロエスはセビーリャやコルドバの法官を務め，一時期宮廷医としても仕えた。

スとその註解者の権威を強める方向に進んだのかを提示している（p. 124）。

本章の優れた点は，ムワッヒド朝期の新プラトン主義的あるいはアリストテレス主義的思想家の研究方法と彼らのカリキュラムが，種々の著作物とどう関わっているかを端的に描いた点にある。著者は，ムワッヒド朝のエリートのためのカリキュラムは哲学的ではないが，新プラトン主義者とアリストテレス主義者は，まず論理学から学習を始めると述べている（p. 126）。しかし，アリストテレス主義者がアリストテレスのテキストと注釈に忠実であるのに対して，新プラトン主義者はアラビア文学のアダブ（adab）[4]の伝統に基づいた，文学的手法を好む傾向があると説明している（p. 127）。

著者は，ムワッヒド朝の方針が 12 世紀の様々な学的発展を促したことを示唆している。例えば，ムワッヒド朝初期の法理論は，慣習法を重視するマーリク学派の思想に根づいていたが，マーリク学派からザーヒル学派に転じたイブン・ハズム（Ibn Hazm, d. 1064）に対する反動からか（p. 80），慣習法（furūʿ）を軽視し，法源（uṣūl）へ回帰したことが，マイモニデスとアヴェロエスの法的活動に影響したと論じている。実際，マイモニデスの法解釈の方法は，法を法源と原理によって分類する，ムワッヒド朝の方法論に導かれたものであると，著者は主張する（pp. 146–150）。ただし，アンダルスのユダヤ法学がイスラーム思想から影響を受けたことは事実であるとはいえ，アンダルスのラビ派法学は，マイモニデス以前にかなり進展していることから，イスラーム的方法論の影響についてはさらなる検討を要すると考えられる。

著者は結論で，イベリア半島の南部はジブラルタル海峡を挟んでアフリカ大陸に面し，北部はヨーロッパ大陸と地続きであるもののピレネー山脈により閉ざされているという地理的特殊性があるために，「この半島」は文化的共通性が高く，追跡し易いと語っている（pp. 168–169）。著者が記すように，アンダルスの哲学史の概要は知られてきたものの，詳細が語られることは稀であり，語られたとしてもイスラーム思想とユダヤ思想は別個に語られ，さらに政治，宗教，哲学が，それぞれ別個の歴史として扱われてきた。それは，異なる区分を繋ぎ，首尾一貫した物語にするための線が明確でなく，さらに困難であったからであろう。

本書では，あまり知られていない固有名詞が頻出し，このため，調べながらでないと理解ができず，読み進めるにはかなりの時間を必要とした。とはいえ，10 世紀から 12 世紀のイスラーム思想，ユダヤ思想，キリスト教思想を研究する研究者にとって，相互の関係を様々な一次資料を駆使して描き出した本書は，貴重な研究書であると言えよう。参考文献と索引が充実しているという意味でも，中

4） 原義の礼儀作法や教養から転じ，文学一般を意味する。中世では，人徳や品性の高さ，さらに古典アラビア語で書かれた文芸を指す。

世哲学を志す研究者にとって，非常に有意義な一冊になるであろう。